様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２５９４

研究課題名（和文）（間）主観性の観点から見た日英語表現に関する認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Study of English and Japanese Expressions: From the Perspective of (Inter)subjectivity and Objectivity

研究代表者
堀田　優子（HORITA, Yuko）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：９０３０３２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：
本研究では、特に「他動性」と「主語」にまつわる英語と日本語の様々な表現を取り上げ、認知言語学の客観性・（間）主観性の観点から、日英語の表現形式とそれに反映される事態把握の仕方との関係性について明らかにしようとするものである。中でも、「他動性」にまつわる英語の同族目的語構文や移動使役構文の拡張パターンについて、その動機づけを事態認知の観点から説明した。また、「主語」については、日本語の小説とその英語翻訳からなる、日英語のパラレル・コーパスを作り、主語が表されていない日本語表現に対して英語翻訳では特にyouやweが用いられている場合に着目して（間）主観性の観点から分析を試みている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「主語」や「他動性」の問題に関する研究はこれまで多くなされてきたが、それらの個々の研究成果を整理し、改めて「客観性／（間）主観性」の観点から検証し直すことで、日英語の表現形式の根底に働く認知モードが明らかになり、さらには、典型的な表現形式からの拡張パターンについても人間の認知の仕方（概念化）に裏打ちされた動機づけを明らかにすることができる。また、客観性・（間）主観性に基づく類型化の研究に向けて、パラレル・コーパスを用いた、詳細で実証的な分析の必要性とその試みの一端を示すことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：
This study aims to explicate the relationship between objectivity/(inter)subjectivity, which are associated with Cognitive Grammar (Langacker 1987,1991), and English and Japanese expressions, in particular, related to ‘transitivity’ or with/without a grammatical subject. The present study has clarified a motivation for certain extended patterns in English cognate object constructions and caused-motion constructions by examining them in terms of ‘construal.’ Moreover,the parallel corpus I made consisting of a Japanese novel and its English translation helps me compare the two texts understanding the context and especially explore a motivation for the choice of referring expressions (e.g. ‘you’ or ‘we’) in the subject position in English translations of Japanese original sentences without a grammatical subject, from the perspective of (inter)subjectivity.

研究分野：英語学

キーワード：認知言語学　（間）主観性　構文研究　事態把握　他動性　主語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

認知言語学、とりわけ認知文法（Langacker 1985,1987,1991,2009）では、「言語構造は認知の仕方を直接反映したものである」と考え、ことばの「意味」には、その概念内容だけでなく、それをどのように捉えたのかという、「捉え方（解釈の仕方）」も含まれると主張する。そして、概念化者（話者）と記述対象である客体との関係を、観る側と観られる側の関係に置き換えて捉えた視点構図を用いて、概念化者による２つの事態把握（「客観的事態把握」と「主観的事態把握」）と言語表現との間の対応関係を示している。Langacker の二つのタイプの視点構図は、言語間の事態把握の傾向の違いを捉える際にも適用され、これまで多くの日本人研究者によって、「欧米の主要な言語では客観的な事態把握を基本としており、日本語では主観的な事態把握を基本としている」と主張されている（池上(2004, 2005)による「客観的把握」と「主観的把握」、中村(2004)の「D モード」と「I モード」、Uehara(1998)の「客観的フレーム言語」と「主観的フレーム言語」など）。その後も、主観性現象は関心を集め、さらなる研究が進展していると言えるが（坪本他(編)(2009)や澤田(編)(2011)など)、「(間)主観性／主体性」の問題の捉え方や分析の有り様は様々であるのが現状である。

本研究では、日英語の違いとしてよく取り上げられる、「主語」や「他動性」の問題に関わる日英語の様々な表現形式を取り上げ、主に認知文法に基づき、「客観性／（間）主観性」の観点から捉え直し、人間の事象の「見方（捉え方）」とその言語形式との対応関係の多様性を明らかにしたいと考える。

まず、「主語」に関しては、例えば、「英語においては、主語が明示されなければならず、概念主体を示す一人称主語であっても省略できないが、日本語では省略可能である」ことが知られており、日本語の主語の特徴づけに関しては、野田(2002)や益岡(編)(2004)などの研究がある。また、ヴォイス（態）に関わる「他動性（transitivity）」の問題は、Hopper＆Thompson (1980)に始まり、多くの言語事象の分析に用いられてきた（通言語学的研究としては、池上(1981)、角田他(編)(2007)など）。本研究代表者も、これまで英語の結果構文や同族目的語構文を中心に、他動詞構文の形を取りながらも、他動詞だけでなく自動詞も共起できる、特異な言語表現に関して「他動性」の観点も取り入れた研究を進めてきた。

これまで、「主語」や「他動性」の問題が関係する個々の言語事象の研究は多くなされてきたが、「客観性／（間）主観性」の観点から統一的包括的に検証し直した研究は少なく、そうした観点から個々の事象を捉え直すことで、各言語の表現の根底に働く認知モード、さらには、人間の認知の仕方（概念化）と言語形式との多様な関係性が明らかになると考え、研究を進めることとした。

２．研究の目的

本研究は、認知言語学の客観性・(間)主観性の観点から、英語や日本語の様々な表現形式とそれに反映する事態把握の仕方との関係性を明らかにすることを目指す。

「主語」や「他動性」が関わる研究は、これまでも多くなされてきたが、そうした個々の研究成果を整理し、改めて「客観性／（間）主観性」の観点から検証し直すことで、各言語で好まれる表現形式の根底に働く認知モードが明らかになり、さらには、人間の認知の仕方（概念化）と言語形式との多様な関係性が明らかになると考え、こうした統一的包括的な研究が待たれていると言える。

具体的には、本研究では、「主語」と「他動性」にまつわる日英語の言語現象を取り上げる。まず、「主語」に関わる問題として、日英語における主語表記の有無の条件、英語特有の表現である形式主語 it や談話で用いられる you や we の役割などをみていく。次に「他動性」にまつわる問題としては、日英語における「他動詞文／自動詞文」で示される事象の違いと、日本語のヲ格を取る表現と対応する英語表現の違い、一方の言語には見られない独特な表現（例：She smiled a happy smile. 雨に降られた。）などを取り上げる。これらの個別の言語事象の研究を通して、言語間あるいは表現間の相違点・多様性を指摘し、客観性・(間)主観性に基づく類型化の研究に対しても、より詳細で実証的な検討を試みるための方向性を示したいと考える。

３．研究の方法

まずは、先行研究の「客観性／（間）主観性」に関する最新の研究動向を探り、これまでの研究において研究者や理論によってばらつきが見られる関連用語や概念を整理し、その概念の再定義を試みる。

次に、研究対象とする日英語の「主語」にまつわる言語現象を扱った膨大な数の先行研究を整理し、検証を行う。特に、日英語における主語の有無の条件に関わる研究、英語の形式主語や談話で用いられる you や we の役割などを扱った研究を取り上げる。また、並行して、「他動性」に関する先行研究を整理し、日英語における「他動詞文／自動詞文」で示される事象の違い、日本語のヲ格を取る表現と対応する英語表現の違い、日英語におけるそれぞれの独特な表現を扱った研究も検証する。

そして、本研究で取り上げる言語表現に関して、認知文法に基づいて客観性・(間)主観性の観

点から分析を行う。その際、日英語の対象構文（表現）の実例を集めるため、大型コーパス（British National Corpus や Corpus of Contemporary American English、日本語の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』など）や Web 検索等から、データを抽出し、データベース化する。英語のデータに関しては、ネイティヴのコンサルタントに適宜容認性や意味の違い等について意見を求め、確認する。さらに、文脈をきちんと捉えた分析を行うため、日本語（原文）と英語（翻訳）で出版されている小説によるパラレル・コーパスを作成し、分析データの充実を図る。

４．研究成果

まず、「（間）主観性／客観性」の問題に関する最新の研究動向を探り、事態把握にまつわる概念の整理と統一化を図り、客観性・(間)主観性に基づく類型化の研究への知識基盤を固めることに努めた。

次に、具体的な研究成果として、まず「他動性」が関係する、英語に特徴的な、他動詞構文をベースにしたいくつかの構文を取り上げて、その分析結果を研究発表や論文の形で発表した。

本研究で理論的枠組みとして用いる認知文法では、言語には私たち人間の事態認知の仕方、すなわち、ある状況を見る認知主体の「捉え方（construal）」が直接反映されていると想定する。中でも、「認知的際立ち」という要因が言語構造を決定する基本的要因となって、たとえば、英語の他動詞構文は、認知主体の客観的な事態把握に基づき、「一番際立つ参与者（トラジェクター）が主語であり、第二の際立ちが与えられた参与者（ランドマーク）が直接目的語である事態」を表すと考えられている。典型的な他動詞構文は、他動詞が直接目的語をとる場合であるが、英語では、自動詞が目的語位置に名詞句を取る場合がある。ここでは、日本語には対応する表現形式がない、Mary laughed a hearty laugh.のような英語の同族目的語構文（cognate object construction）を取り上げ、どうして自動詞のあとに同族名詞句をおく他動詞構文の形式が許されるのか、その動機づけを明らかにし、そこには「認知主導」による構文構築（中村(2004)）が行われていると主張した。つまり、同族名詞句が直接目的語として生起するのは、動詞の意味から想定されることではなく、むしろ、認知主体の捉え方に基づく認知主導で構文構築が行われ、さらにそれが「構文」として定着すると、次は「構文主導」によって、自動詞でありながら同族目的語構文の受動文の構築までが可能になっていると捉えることができることを明らかにした。また、同族目的語に現れる限定詞（不定冠詞，定冠詞，所有形容詞，指示形容詞）の働きにも着目し、認知主体の主観的な解釈と関係するグラウンディングの観点から、各限定詞の機能が同族目的語構文の解釈においても重要な役割を果たしていることを示した。

また、「移動」という基本的な事態が関係する、英語の移動使役構文（caused-motion construction）を取り上げ、中でも、構文文法（Goldberg (1991, 1995)）で提案されている「単一経路制約 (Unique Path Constraint)」を一見破っているように見える実例について、事態認知モデルを用いて、典型例からの拡張パターンとして認められる、その動機づけを明らかにした。移動使役構文は、John kicked the ball into the goal.のように「NP_1－V－NP_2－PP」という形式が、「NP_1 による NP_2 への（動詞が示す）行為によって NP_2 が前置詞句で示される経路を移動する」という意味と結びつく「構文」であると考えられている。そこには、動詞と前置詞句で示される経路が枝分かれをしない「単一経路」であるという制約が働いているが、一見、その制約を破っているように見える実例がある。それは、状態変化動詞が経路句と共起する The cook broke the eggs into the bowl. のような例であり、結果構文と移動使役構文の 2 つの構文が融合したようにみえる。2 つの構文にまたがるそうした形式がなぜ容認されるのか、概念化者の事態認知の観点から、その動機づけについて新たな説明を試みた。また、こうした表現形式の存在が、英語の２つの構文（結果構文と移動使役構文）間の派生関係において、別のタイプの意味拡張を生み出している可能性についても示唆した。なお、日本語の移動にまつわる表現との比較については、まだ先行研究をまとめている段階に留まっているが、引き続き、研究を進めたいと思っている。

また、日英語の「主語」にまつわる言語現象についての研究は、現段階でははっきりした成果をあげていない。その分析にあたって、まず文脈をきちんと捉えられるように、日本語（原文）と英語（翻訳）で出版されている小説(1 作品)によるパラレル・コーパスを作成し、分析データの充実を図った。パラレル・コーパスには、日本語は約 13 万 7 千字、英語の翻訳の単語数は約 7 万語が含まれる。そのパラレル・コーパスを用いて、日本語では主語が明示されていない表現で、英語の翻訳において、特に you や we で主語が示される場合、主語選択と主観的、間主観的な解釈との関係性を明らかにすべく、現在、継続して研究を進めている。

＜引用文献＞

Goldberg, Adele E. (1991) “It Can’t Go Down the Chimney Up,” *BLS* 17, 368-378.
Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions,* Chicago: University of Chicago Press.
Hopper, Paul and Sandra A. Thompson (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse,” *Language* 56. 251-299.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』 東京：大修館書店.
池上嘉彦 (2004・2005)「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標」, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹(編)『認知言語学論考』, No. 3, 1-49, No. 4, 1-60, 東京：ひつじ書房.
Langacker, Ronald W. (1985) "Observations and Speculations on Subjectivity," in John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, 109-150, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol.1*, Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
Langacker, Ronald W. (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2, *Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, CLR 42, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
益岡隆志(編)（2004）『主題の対照』, 東京：くろしお出版.
中村芳久 (2004)「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」, 中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』, 3-51, 東京：大修館書店.
野田尚史（2002）「主語と主題—複合的な概念である「主語」の解体に向けて」『言語』31-6, 38-49.
澤田治美(編) (2011)『主観性と主体性』, ひつじ意味論講座(5), 東京：ひつじ書房.
坪本篤朗・和田尚明・早瀬尚子(編) (2009)『「内」と「外」の言語学』, 東京：開拓社.
角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編) (2007)『他動性の通言語的研究』東京：くろしお出版.
Uehara, Satoshi (1998) "Pronoun Drop and Perspective in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 7, 275-289, Stanford: CSLI Publications.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 堀田優子	４．巻 －
２．論文標題 「英語の結果構文と移動使役構文のプロトタイプと拡張をめぐって」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第90回大会＋2017年度支部大会Proceedings	６．最初と最後の頁 215－216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 堀田優子
２．発表標題 英語の同族目的語構文と事態認知
３．学会等名 筑波大学言語学講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀田優子
２．発表標題 英語の結果構文と移動使役構文のプロトタイプと拡張をめぐって
３．学会等名 日本英文学会中部支部第69回大会、シンポジウム「英語経路表現の諸相」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中村芳久教授退職記念論文集刊行会（代表：堀田優子）、堀田優子（執筆者42名のうちの1名）	４．発行年 2018年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 ５５２ページ（うち 260－272ページ）
３．書名 「英語の同族目的語構文－構文構築とその特性－」『ことばのパースペクティヴ』	

１．著者名 米倉綽・中村芳久（編著）、堀田優子（執筆者12名のうちの1名）	４．発行年 2018年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 ２５４ページ（うち 143－160ページ）
３．書名 「Mary smiled a merry smile.は「陽気な微笑みを微笑んだ」？ ―同族目的語構文の特性と意味解釈―」『英語学が語るもの』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考